

# ノダの持つ「手続きの意味」に関する一考察

名嶋 義直

キーワード 手続きの意味、解釈の制約、表意命題、推意命題、高次表意

## 0. はじめに

本稿は、関連性理論の枠組みを用いノダを考察したものとして、管見の限り代表的なものである武内（1994）、内田（1998）を検討し、その問題点を指摘する。そして、ノダを「手続きの意味」（聞き手の解釈をある特定の方向に導くという機能）の観点から検討し、ノダが3種類の異なる、しかし、相互に関連する「手続きの意味」を持つと考えられることを結論として示す。

## 1. 先行研究

### 1.1. 関連性理論

いわゆる関連性理論は人間の認知システムに関する研究であり、特定の言語研究の範囲に留まるものではない。しかし、一方ではノダの分析に有効な考え方もいくつか提唱されている。そこで本節では、関連性理論の中心を成す Sperber & Wilson（1986／1995）を中心に、本稿に関係のある関連性理論の諸概念についてごく簡単に確認する。

#### ①文脈の重要性

関連性理論では発話理解における文脈の役割を重視する。関連性理論という文脈とは、先行発話や発話状況のみにとどまらず、人が推論や発話理解に用いることができる情報（前提）の部分集合をいう。そして、文脈は固定化されたものではなく、発話展開に応じダイナミックに変化すると考える。

#### ②関連性の程度の決定

関連性理論では、ある発話が既存の文脈を変化させることを「文脈効果」<sup>注1</sup>をもたらすことであると考え、関連性の程度は「文脈効果の程度」と「発話の処理コストの大きさ」との相関関係で決定されたとする。文脈効果の度合いが大きい程、その発話の関連性は高くなる。しかし、発話理解には労力、言い換

えれば処理コストが必要である。そのため、その他の条件が同一である場合には、発話の処理コストが低ければ低い程、当該発話の関連性は高くなると考える。

### ③最適な関連性

人は最小のコストで最大の成果を得ようとする性向を持っている。これは発話理解においても当てはまる。つまり、人は最小のコストで最大の文脈効果を得ようとする性向を持つ。言い換えれば、「最適な関連性」を追求するということである。ある発話が「最適な関連性 (Optimal Relevance)」を有するのは、当該発話が (a) 聞き手の注意を引くに十分値する文脈効果を持っており、かつ、(b) それらの文脈効果を導き出すのに不必要な処理コストを課さない場合である。

### ④文脈効果の内容

文脈効果は3つのタイプに分けられる。まず第一は、ある発話が既存文脈と組み合わせることによって新しい含意を生み出す場合で、「文脈含意」と呼ばれる。第二は、ある発話が既存の文脈の確信度を高める場合である。これは「強化」と呼ばれる。また、ある発話が既存の文脈と矛盾し、その結果、既存の文脈が破棄される場合がある。これを本稿では「却下」と呼ぶ。

### ⑤関連性の認定

関連性理論では④のような文脈効果が導き出される場合、そしてその場合に限り、当該発話が関連性を持つとする。しかし、本稿ではこの考えを拡大し、文脈効果が導き出される場合、または導き出されうと想定される場合、「当該

<sup>18)</sup> 文脈効果の例としては次のようなものが考えられる。

「文脈含意」：文脈「雨が降れば運動会は中止だ」＋事実「雨が降っている」→「今日の運動会は中止だ」

「強化」：文脈「雨が降っているかもしれない」＋事実「雨が降っている」→「(やっぱり) 雨が降っている」

「却下」：文脈「雨が降っている」＋事実「いい天気である」→「雨は降っていない」

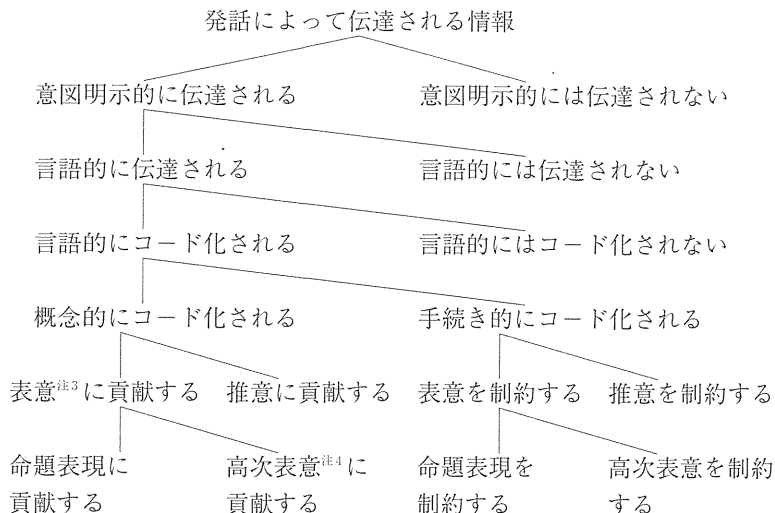
文脈含意とは、知覚した情報と文脈との組み合わせにおいて生じる含意である。但し、上の例は非常に単純な例であり、実際には複雑な文脈含意も存在する。例えば、「聞き手がいい時計をしている」という事実と「先週聞き手の誕生日であった」という文脈との組み合わせから「その時計は誕生日のプレゼントである」という命題を導き出すのも文脈含意の例である。この場合、「誕生日にはプレゼントをもらうことがある」という世界の知識が推論を「橋渡し (bridging)」している。強化は、知覚した情報によって既存文脈が確固たるものとなる場合である。却下は、知覚した情報と既存文脈とが矛盾し、既存文脈が却下される場合である。なお、このような文脈効果を生じさせる推論を本稿では関連づけと定義する。つまり、関連づけとは「ある文脈と新たに受け入れた情報 (発話) との組み合わせによって文脈効果を得る推論行為」である。

発話P」「当該文脈C」「文脈効果Q」として導き出された命題の三者は相互に関連性を有すると考える。

#### ⑥概念的意味と手続きの意味

Wilson & Sperber (1993: 3) では発話によって伝達される情報が (1) のように分類されている。ここで重要なのは、「概念的にコード化される (conceptually encoded)」と「手続きの意味にコード化される (procedurally encoded)」とが明確に区別されている点である。このことは語が「概念的意味 (conceptual meaning)」を持つものと、「手続きの意味 (procedural meaning)」を持つものとに分けられることを意味する。<sup>注2</sup>簡単に言うと、概念的意味とはいわば字義の意味に直接的に依存するもののことである。一方、手続きの意味とはある発話を理解していくその方向や手順・過程を聞き手に対して示すという働きを持つものであり、それによって聞き手は解釈の方向のある特定のものに制約される。

#### (1) Wilson & Sperber (1993: 3) の分類



<sup>注2</sup> 但し、この指摘は全ての言語形式が「概念的意味」か「手続きの意味」のどちらかに分類されるということの意味するものではない。実際、Wilson & Sperber (1993) ではその両方の特徴を持つ同形式の文副詞と程度副詞の例が取り上げられている。

<sup>注3</sup> 関連性理論では命題の復元にも推論が関与すると考える。提示された命題は、指示代名詞の指示付与、曖昧性の一義化、富化（意味的、論理的な肉付け）を経て「表意命題」として復元されると考える。

<sup>注4</sup> 関連性理論で言う高次表意とは、簡単に言うと、話し手の命題に対する態度（認め方、確信度等）や発語内行為の抗力（言明、宣言、質問、命令等）を指す。

## 1.2. 先行研究—武内（1994）と内田（1998）—

武内（1994）は、1.1で紹介した関連性理論の考えを用い、ノダが手続き的意味を表している」と分析している。具体的には、『のだ』は聞き手の解釈が関連性の原理と一致するところで行われるよう、解釈に制約を課す有効な手段であるといえる」（p. 8）と述べ、その機能ゆえ『のだ』発話は直前の呼び出し可能な命題の文脈含意として解釈される」（p. 11）と述べている。

(2) (遅刻してきた学生が) 寝坊したのです。<sup>注5</sup> (p. 9、下線引用者)

(3) (自分の新しい車を見せて) 新車買ったんだ。 (p. 9、下線引用者)

(2) について、武内は次のように述べている。

「のだ」の使用から私（聞き手である教師、引用者注）はその発話の命題が、私が既に入手している命題（遅刻してきたこと）の文脈含意であることを仮定するのである。関連性の原理が話し手は聞き手である私に適切な文脈効果を最小の労力で与えるように努めたと私に仮定させることで、(20)（原文での例文番号、本稿での（2）に該当する。引用者注）は関連性を有すると説明される。（p. 10）

言い換えると、話し手はノダを用いて、提示される命題が文脈含意であることを明示しており、聞き手はノダの使用から、提示されている命題が「最適な関連性」を有した文脈含意であると解釈するということである。したがってノダは発話の関連性に制約を課す「手続き的意味」を持つとされる。

内田（1998）も武内（1994）と同様、ノダを関連性理論の観点から考察している。内田は、Sperber & Wilson（1986／1995:224－231）の「描写的用法（descriptive use）」と「解釈的用法（interpretive use）」との区別を分析に適用している。簡単に言えば、この区別は三尾（1948）の「現象文」と「判断文」の区別に対応する。そして、ノダ文に「話者の主観的関与が認められる」こと、ノダが「話者の主観が関わる他の助動詞（ダロウとマイを指す。引用者注）とは一般に共起しない」こと、また、ノダ文においては主格補語が第三人称であっても感情形容詞が使用できることを根拠にし、ノダは「話者の主観的判断を表す解釈的用法のマーカーである」（pp. 245－246）と述べている。

更に内田は、ノダの解釈が発話行為や命題態度に反映されることを根拠にし、『の（）だ』は何らかの『話し手の関与』を暗示するものであり、その方向に

<sup>注5</sup> 実際の場面では、教師から遅刻の理由を問われることなく、学生自らが「寝坊したんだす」と発話するとは考えにくい。通常であれば、「寝坊しました」というような発話になるであろう。一方、教師が「どうして遅刻したんですか」と尋ねた場合であれば、「寝坊したんだです」は全く問題がない。逆に、この場合、どちらかと言えばノダは必須であると言える。なぜこのようなことが起こるのかについては別稿の考察に譲る。

聞き手の注意を向ける働きがあるのである。この点で、関連性理論でいう、手続き的 (procedural) 意味をもち、聞き手が高次表意を復元するのに貢献するのである (同:249)」と述べている。

### 1.3. 問題点

武内 (1994) で問題となるのは、ノダが提示する命題が「文脈含意」に限られるのかという点である。1.1で述べたように、文脈効果は「文脈含意」「強化」「却下」に下位分類される。したがって、「強化」や「却下」という文脈効果がノダ文で提示される場合もあると思われる。また、確かに武内 (1994) が提示した (2) (3) の例は「文脈含意」と考えるにふさわしいが、次のような例は「文脈含意」を提示しているとは考えにくい。

(4) A: (社交辞令的に) 彼女、元気?

B: 彼女、先月結婚したんだ。

話し手Bの発話を受け、聞き手Aは「Aは彼女と別れた。Aと彼女とはもう関係がない」といった文脈含意を得る。しかし、ノダが聞き手にとっての「文脈効果」を提示するという武内の主張では (4) のノダの機能を説明することが困難である。Bの発話は、BがAに導き出すことを期待する文脈含意そのものではないからである。

一方、内田 (1998) では「何らかの話し手の関与」の内容が明確に記述されていないという問題点がある。ノダが「手続き的意味」を持つと述べられているが、如何なる「手続き」を提示しているのかが明らかではない。また、ノダが関与するのは「高次表意」に限られるのかという点も問題になる。

## 2. 聞き手が求める文脈効果を提示するノダ

### 2.1. 提示する命題の特徴

本節では、ノダが文脈含意のみを提示する可否かという点について考察する。ノダが文脈含意を提示すると考えられる場合は次のような場合である。

(5) (学生の様相。髪には寝癖、ひげも剃っていない。)

学生: 寝坊したんです。

教師の行った関連づけは (6) であると考えられる。

(6) 状況: 学生の髪には寝癖がある。ひげも剃っていない。

文脈: そのような状況を引き起こす事態に関する世界の知識。

文脈含意: この学生は寝坊したのだ。

この場合、(5)のノダで提示された命題は聞き手にとっての文脈含意と一致する。その証拠に、学生の発話を受け、教師は次のように考えるであろう。

(7) やっぱり寝坊したんだ。

次のような例も同様の考え方で説明できる。

(8) (友人が新車で学校にやってきて、Aに見せている。)

B：新車買ったんだ。

(8)の発話に先立ち、Aが行う関連づけは、たとえば(9)のようなものである。

(9) 状況：友人が新車に乗って来て、その新車を見せている。

文脈：車の所有・入手方法に関する世界の知識。

文脈含意：友人はこの車を買ったんだ。

(9)の文脈含意は「友人が新しい車を持っていること」から導き出された文脈含意であり、(8)Bの発話はAの引き出した文脈含意と一致することになる。

(10) やっぱり新車を買ったんだ。

(6)や(9)の文脈含意がまだ聞き手によって導き出されていないとすると、(5)学生や(8)Bのノダ文は、「聞き手が導き出すであろうと話し手が期待する文脈含意」を提示していることになる。

しかし、話し手が聞き手に導き出すことを期待する文脈含意が既に聞き手によって導き出されている場合、話し手の発話は聞き手の文脈含意を「強化」することになる。また、聞き手の持つ文脈含意が話し手の提示した命題とは異なる場合、聞き手の文脈含意が却下され、ノダで提示された命題が新しい文脈含意になる。<sup>注6</sup>したがって、「その発話の命題が、私（聞き手を指す。引用者注）が既に入手している命題（遅刻してきたこと）の文脈含意であることを仮定するのである」という武内（1994：10）の規定は厳格すぎる。

## 2.2. 文脈効果そのものを提示する場合

もし、ノダが「最適な関連性」を持つ文脈効果を意図明示的に提示している

<sup>注6</sup> 「却下」という文脈効果を持つ命題を提示する場合、ノダは必須である。「却下」は既存文脈を却下し、必然的に新しい文脈含意を得ることになるため、文脈含意を提示する場合と同様ノダが必須であると考えられることができる。一方、「強化」の場合は、ノダは用いられにくい。この理由は、文脈効果の強さに起因すると思われる。新しい文脈効果を得る場合に比べて、「強化」の場合、既存の文脈自体にある程度の関連性があるため、ノダでマークすると「念押し」になるためと考えられる。ただし、副詞を用いればノダの使用は許容される。副詞を含めて1つの（類似しているが）異なる命題となるためである。

(雨が降っているかもしれないと思いつ、窓を開けた) やっぱり雨が降っているんだ。

とすれば、ノダ文を受けて聞き手はいかなる関連づけも行う必要はない。なぜなら、「最適な関連性」を持つ文脈含意が提示されているにも関わらず、更なる関連づけを行うことは発話処理に必要以上のコストを払うことであり、これは当該発話の関連性が低下することを意味するからである。

「どこ」「いつ」等、疑問詞を用いたノカ文に対する回答を行う場合は、回答として提示する当該命題が最適な関連性を既に有している場合である。

(11) A：どこへ行くんですか。

B：東京へ行くんです。／東京です。

(12) A：いつ行くんですか。

B：来週の金曜日に行くんです。／来週の金曜日です。

発話に先立ち、(11) (12) Aは、何らかの言語的・非言語的情報を知覚し、自らの持つ文脈と組み合わせ、関連づけを行うことによって文脈効果を導き出したと考えられる。たとえば、それは(11)では「BはP[場所]に行く」、(12)では「BはT[日時]に行く」といった文脈効果そのものとしての命題である。しかし、話し手であるAは情報の不足から命題の一部の要素を確定することができず、「最適な関連性」が得られていない状態にあると考えられる。そこで、AはBに「命題+ノデスカ」という形式で問い、それら不確定要素を確定させることによって、最適な関連性を得ようとしていると考えられる。<sup>注7</sup>

これらのノダ文は質問者の疑問の焦点に対する回答をその中に含んでおり、Aが導き出そうとして完全には導き出せなかった完全な文脈効果そのものである。但し、疑問の焦点にのみ解答することは、焦点となる語句（たとえば、名詞、数量詞、副詞等）を提示するだけで可能であるため、(11) (12) で併記したようにノダを用いなくともよい。<sup>注8</sup>

Bの発話を受け、Aは確定することのできなかった命題の一部を確定することができ、最適な関連性を有する命題を完成することになる。したがって、(11) (12) のBの発話は武内の言う「文脈含意」に相当すると考えられる。この点において、武内の主張は妥当性を有している。

この場合、ノダの手続き的意味は発話を「文脈効果として解釈させる」という機能であり、「表意命題」レベルで機能すると言える。ただ、問題となるのは(11) (12) のノダ文はノダがなくても許容されうるという点である。<sup>注9</sup>

<sup>注7</sup> ノカに関しては、本稿の時点では基本的に青木（1996）を受け入れる。

<sup>注8</sup> たとえば、「名詞なノダ」というノダ文においてもノダの使用は任意である。

A：どこに行くんですか。→B：東京です。／東京なんです。

先行研究では、両者の違いについて指摘こそされているものの明確な説明は管見の限り行われていない。機会を改め、別稿で考察する予定である。

(13) A：どこへ行くんですか。

B：東京へ行きます。

(14) A：いつ行くんですか。

B：来週の金曜日に行きます。

許容度に個人差があると思われるが、(13) (14) はそれほど違和感を感じさせない。したがって、(11) (12) の類いのノダ文を論じるだけでノダの本質を論じるならば、過度の一般化を招くおそれがある。

### 2.3. 文脈効果の一部を提示する場合

ノダ文の中には、文脈含意そのものを提示しているのではないと考えられる場合が存在する。(15) (16) は武内 (1994: 9) が「話し手が聞き手に望む文脈含意」を提示しているとした例である。これらには、武内 (1994: 9) が指摘する通り「言語的に先行する発話はない」と言える。

(15) (遅刻してきた学生が) 寝坊したのです。

(16) (自分の新しい車を見せて) 新車買ったんだ。

武内 (1994) は、話し手が遭遇したある情報 I は「聞き手にとっても即座に呼び出せる情報であるから、これをわざわざ言語的に提示しなくてもよいのである」(p. 10) と述べているが、この情報 I は単なる遅刻した事実を指すのか、もっと広い状況、話し手の推論によって認識された状況 (例えば、理由を問われているという判断) 等も含むのか不明である。

本稿では、話し手が置かれた状況とは、物理的な状況だけを指すのではなく、自らが置かれていると判断する状況であると考ええる。そして、その状況は、知覚可能な事態と推論とによって形成され则认为る。人は過去の経験 (自らの実体験や知識としての間接的体験) の蓄積から、多くの「事態のスキーマ」とでも言うべき情報、たとえば、遅刻というものがどういう事態を指すか、どういう理由で起こりうるかといった「遅刻のフレーム」や、人が遅刻した時、周囲はどのような態度をとるか、その時人はどのように対処すべきかといった「遅刻のシナリオ」などのスキーマ的知識を持っていると考えられる。そして、それらは関係する他のスキーマと結びつき、より大きな「遅刻のスキーマ」を形成し、記憶の中に存在していると考えられる。

このスキーマの存在により、遅刻した学生は教師から理由を求められている状況であると判断し、教師の側も学生が遅刻の理由を述べていると判断するの

注9 逆に状況によってはノダ文であっても関連性が低くなる場合もあろう。聞き手は話し手がどこへ行くかどうかにはそれほど関心がないような社交辞令的発話などがそのような場合である。



が一般的であろう。よって、(15)の発話を受け、教師は次のような文脈含意を得ることになると考えられる。

(17) 学生：寝坊したんです。

教師：(この学生は寝坊したので遅刻したのだ。)

遅刻には何らかの理由があるものであるが、その理由を教師が推測することができない場合(18)のような不完全な文脈含意が導き出されることになる。

(18) 状況：学生が遅刻してきた。

文脈：遅刻の原因に関する世界の知識。

文脈含意：この学生はRという理由で遅刻したのだ。

(15)の発話はRに該当する命題を提示している。教師は「寝坊したんです」という学生の発話を受けて、瞬時に納得するが、それは「寝坊したこと」を「遅刻の理由」として納得するのである。「寝坊した」という事実に納得するのではない。この場合、ノダの手続き的意味は「提示された命題と発話状況とを関連づけることにより、ある表意命題を導き出す」という解釈方法を明示することであると考えられる。ノダの手続き的意味は「表意命題を制約」することにあると言える。<sup>注10</sup>

### 3. 文脈効果ではない命題を提示する場合

2.2で例に挙げた「どこ」「いつ」「だれ」「なに」といった、疑問詞を用いたノカ文に対する回答を行う場合であっても、疑問の焦点に直接合致した回答が行われない場合がある。たとえば、次の例のような場合である。

(19) A：どこへ行くんですか。

B：東京で研究会があるんです。／＼東京で研究会があります。

(20) A：誰と行くんですか。

B：興味のある人は周りにいないんです。

<sup>注10</sup> 詳しくは別項に譲らなければならないが、本稿ではこのような2事態を因果関係づけた命題を「推意」ではなく「表意」レベルで捉える。「寝坊したので遅刻した」は「遅刻した」という状況を考慮して発話の意味を論理的に肉付けすることにより得られるものであるからである。この学生の発話に対し、別の学生が「いいえ、違います」と言ったとしよう。この場合、述べられているのは「寝坊しなかった」ではなく(寝坊したことを認めていても「いいえ、違います」と言える)「寝坊したので遅刻したノデハナイ」である。両者の因果関係までが否定されることから、因果関係の推論までを表意として認めるべきであると考えられる。表意と推意との区別については、Carston (1988)を参照した。

# 興味のある人は周りにいません。

ノダを用いていない文を聞いた場合、更に質問したくなるであろう。

(21) で、東京に行くんですか。／＃で、東京に行きますか。

(22) で、独りで行くんですか。／＃で、独りで行きますか。

このような質問を生じさせるということは、ノダを用いていないBの回答はAにとって満足のいく回答ではない、言い換えれば、十分な文脈効果をもたらしていないということを意味する。

(21) (22) の質問では通常ンデスカが使用される。2.2で述べたのと同様、この事実は、Aがノダを用いていない回答から何らかの文脈効果を持つ命題を得ようと試みたが、得ることができなかったということを意味する。[Qノダ]という「文脈効果」を導き出すことが出来なかったため、[Qノデスカ]と質問したと考えられるのである。これらの事実は、ノダを用いない(19)(20)Bの発話理解において、Aによって新たな関連づけが行われていること、しかし、その関連づけは完全ではないことを意味する。

それに対し、ノダが用いられた回答の場合、そのような新たな質問は誘発されない。聞き手は、十分な文脈効果を得、話し手の回答に満足したものと考えられる。しかし、ノダが提示している命題は聞き手の疑問の焦点に合致したものではない。このことは、聞き手がやはり新たな関連づけを行い、最適な関連性を有する文脈効果を得たことを意味する。

ノダの有無のみでこのような解釈の差が生じるということから判断して、ノダが聞き手の解釈手続きに関与していると考えることができる。ノダの有無によって聞き手の解釈が変化するからである。その解釈手続きとは「推意」である。この場合におけるノダの手続き的意味は「提示された命題を関連づけて解釈し、推意命題を導き出す」という解釈方法を示すことである。

以上の考察から、(19)(20)ではノダの使用は必須であると考えられる。

(11)(12)でもノダが使用されているが、それらではノダが無くとも許容し得る。(11)(12)と(19)(20)との違いは、前者のグループではBのノダ文のなかにAの疑問の焦点が含まれていることである。言い換えれば、Bの発話はAにとっての文脈効果であるのに対し、後者のグループではBの発話がAの疑問の焦点に直接が合致していない回答である点である。たとえば、(19)Bは「どこへいくのか」というAの質問に対する直接回答とはなっていない。それにも関わらず、Bの発話はAに対する回答として許容される。その理由は次のように考えられる。

自己の質問の焦点に合致した回答ではなくても、ノダが関連性を意図的に明示しているため、聞き手は当該発話が「最適な関連性」を持つことを理解する。

この場合、最小のコストで得られる最大の効果は自己の質問に対する回答である。したがって、聞き手は話し手の発話から自分自身の疑問の焦点に合致した命題（文脈効果）を得ることができる解釈を指向するのである。

一例を挙げると、次のようになる。PはBの発話を基にしてAが復元した命題であり、CはAがBの発話理解のために呼び出した文脈である。そしてQは文脈効果（この場合は文脈含意）である。

(23) (19) Bを受けてAが行う関連づけの例

P: Bは「東京で研究会がある」と言っている。

C: Bはどこかへ行く様子である。東京で行われる研究会に参加するためには東京へ行かなければならない。

Q: Bは研究会に参加するために東京へ行く。

(23) QがAの質問に対する回答となっていることが明らかであろう。この場合、ノダは聞き手が推意命題を得るために行う関連づけの出発点となる命題を示している。つまりノダは「推意を制約する」機能を持つと考えられる。

ここで重要な点が二点ある。第一点は、(19) Bの発話と(23) Qの文脈含意とが一致しないという点である。換言すると、(19) BはAにとっての文脈効果ではない、ということである。そこで、(19) Bがどのような意味を持つのかという疑問が生じる。これが第二点目の重要な点である。

Bの発話はAによる関連づけのために必須である。(19) Bの字義の意味を解釈することによって復元された命題（関連性理論では「表意」と呼ぶ）の概念的意味が、Aに対して「関連づけの方向」を示していると考えられるからである。その点において、(19) BはAにとって関連性のある発話である。文脈Cと組み合わせることによって、(23) Qという文脈含意を生じさせることを可能とさせるからである。以上の考察から、(19) (20) Bの発話は、BがAに導き出すことを期待する文脈含意そのものではないということになる。

ここで更に二つの疑問が生じる。一つは、なぜ(19) (20) のような、焦点に直接合致しない回答が示されるのかという疑問である。二つ目は、(11) (12) で用いられているノダと(19) (20) で用いられているノダとの間にどのような関係があるのかという疑問である。

これらの疑問点も関連性理論の枠組みで説明することができる。たとえば、人が2つの情報を伝達しようと意図しているとする。彼は2つを明示的に伝達することもできるし、どちらか片方だけを伝達することによって、他方を暗に伝達することもできる。後者の場合、どちらを明示的に伝達するかという選択が話し手によってなされることになる。この伝達方法の選択基準は「聞き手にとってどちらの方がより関連性が高いか」という点にあると考えられる。人は

発話に際して、最適な関連性を指向するからである。先に述べたように、関連性は文脈効果の大きさと処理コストによって計算される。その観点から (11) と (19) とを比較してみる。

(24) A：どこに行くんですか。

B：東京に行くんです。(=11)

B'：東京で研究会があるんです。(=19)

(11) は聞き手の文脈含意そのものであるから、聞き手にとって十分な文脈効果を有しており、処理コストもほとんどかからない。それに対して、(19) は、聞き手が関連づけを行って文脈効果を得ている。つまり、(11) に比べて処理コストが多くかかっている。しかし、余分な処理コストであっても、それによって得られる文脈効果の大きさがそのコスト増に見合うものであれば、そのコストに見合うだけの価値があると言える。実際、(19) は「東京へ行く目的:研究会に参加するため」という (11) にはない情報を伝達している。話し手が「この情報は聞き手にとって価値のある情報であると想定すること」は十分妥当な判断であると言える。また、聞き手が「この情報が自身にとって価値のある情報である」と想定することも十分妥当な判断である。

この状況を我々自身に置き換えてみればよい。通常、(11) の発話を受けた後、A には「B は何のために東京へ行くのか」という疑問が生じるであろう。そのような状況では、(11) より (19) の方が文脈効果が大きいことになる。つまり、(19) の話し手は、聞き手に余分な処理コストを払わせることと、それによって得られる文脈効果の大きさを、いわば天秤に掛け、聞き手がコストを払うに値する文脈効果を与えることができると判断してノダを用いた発話を行ったということである。話し手が想定したのは、話し手にとっての関連性ではなく、聞き手にとっての関連性なのである。

誤解のないように確認しておくが、この判断はあくまで話し手の想定であり、必ずしも聞き手の判断と一致するとはかぎらない。たとえば、聞き手が話し手に問いかけたのは一種の挨拶であって、実際の話し手の行動に対して何ら関心を払っていないという状況も考えられる。そのような場合、(19) の発話は処理コストが高い分、(11) に比べて関連性が低くなる。<sup>[11]</sup> コミュニケーションには誤解がつきものであるが、聞き手の無関心が明示的に伝達されていない場合、話し手はこの誤解に気づかないこともあり得る。しかし、これは反例とはならない。失敗したのは「見込み違い」が原因であり、関連性理論の考え方自体に瑕疵があるからではない。

<sup>[11]</sup> ノダがなくても許容される命題に付加されるノダの機能は4章で述べる。

ここまでの考察が、第二の疑問に対する回答になる。すでに武内(1994)で指摘されたように、(11)(12)のノダは「提示された命題が文脈効果(この場合は文脈含意)である」という点において聞き手にとって最も関連性のある命題であることを示していると言える。これに対して、(19)(20)のノダは、提示された命題が「文脈効果ではない命題」であるにも関わらず「最適な関連性を有する」ことを示していると考えられる。ノダによって関連性が意図明示的に伝達されていることから、聞き手は、あえてコストを払い、当該命題を関連づけて解釈し、そのコストに見合う程度の「最適な関連性」を持つ文脈効果を導き出そうとすると考えられる。

提示する命題の性格は異なるものの、両者は「ある命題の最適な関連性を意図明示的に伝達する」という点において共通の機能を持つと考えられる。

#### 4. 高次表意を制約する場合

本章では、ノダが高次表意の復元にどのように関係するかを考察する。

(25) A：(医者が問診で)何かスポーツをしていますか。

B：クライミングをやっています。

C：クライミングをやっているんです。

田野村(1990：8-14)ではノダの使用基準として「承前性」「既定性」「披瀝性」「特立性」が挙げられている。<sup>注12</sup>確かに、この4特性は全て(25)Cに当てはまる。しかし、これらはノダの使用されていないBにも当てはまる。ノダ以外の文の要素は同一だからである。したがって、田野村(1990)の4特性は決してノダのみに認められる特性ではないと考えざるを得ない。(25)Aに対する回答はB・Cのどちらでもよい。しかし、母語話者の感覚から言えば、BとCとでは明らかにニュアンスが異なる。

1.1で触れたWilson & Sperber(1993)によれば「手続き的意味」を持つ形式は「表意を制約する」と「推意を制約する」とものに分けられる。

(25)Cの例が示すように、この場合のノダは「推意を制約する」ものではな

<sup>注12</sup> 田野村(1990)はノダの特徴として、「承前性」(ノダ文の発話に際し、何らかの先行発話や状況が存在し、それを受けてノダが使用される場合が多いこと)、「既定性」(提示する命題の真偽が話し手にとって既に定まったものであること)、「披瀝性」(提示する命題内容が聞き手にとって容易に知り得ない内容のものであること)、「特立性」(他の命題から提示する命題を際立たせるものであること)。「この命題こそが」という提示の仕方」の4つを挙げ、これら四特性がノダの使用条件であると述べている。

い。CはAの疑問の焦点に合致した回答であり、既に最適な関連性を有しており、推意命題を導き出す必要がないからである。したがって、(25) Cのノダは「表意を制約する」ものと考えられる。「表意を制約する」形式は更に「命題表現を制約する」ものと「高次表意を制約」するものとに分けられるが、(25) Cのノダは「命題表現を制約する」ものとは考えられない。ノダを用いても用いなくても表意命題内容に変化はないからである。よって、(25) Cのノダは「高次表意を制約」するものであると考えられる。

高次表意とは簡単に言うと、話し手の命題態度（ムード）や発語内行為（言明・命令・疑問等）を必要に応じ表意命題の復元に取り込んでいくことである。聞き手は、ノダの使用により当該命題に対する話し手の態度や話し手が行う発語内行為を特定化し、それに基づいて表出命題を理解するということである。<sup>113</sup>

(25) との関連で言えば、(26) がその1例である。

(26) Bはクライミングをしていると自慢げに述べている。

Aはある高次表意を取り込んで命題を表意するわけであるが、この時、どのような命題態度や発語内行為を選択するか判断は聞き手Aが行う。その際の基準となるのが、どの発語内行為でもって命題を復元すれば最小のコストで最も最大の文脈効果が得られるかという点である。

(25) の例で言えば、「クライミングをやっています」という命題は既に「最適な関連性」を有している。にも関わらずノダが使用され「最適な関連性を有する命題」であることが意図明示的に伝達されている。既に「最適な関連性」を持つ命題であるにも関わらず、「最適な関連性を有する命題」であることを更に明示すれば、それは関連性の存在を「念押し」することになる。全ての発語は「最適な関連性の見込み」を伝達するので、聞き手は、話し手が「念押し」することによって非ノダ文から得られる文脈効果以上のものを聞き手に期待していると想定し、例えば (27) のような関連づけを行うものと考えられる。

(27) P：話し手はクライミングをしていると述べている。

C：クライミングはやや特殊なスポーツである。

Q：話し手は珍しいスポーツをしていると自慢げに述べている。

当然、文脈C如何によっては異なる文脈含意が導き出されることになる。したがって、(25) Bの解釈は人によって異なる。例えば、「話し手は冒険的なスポーツをしていると誇らし気に述べている」「話し手はスポーツとは言えないようなことをしていると恥じながら述べている」などがその例である。

<sup>113</sup> 内田（1998）が「高次表意への制約」をノダの基本的機能と見ているのに対し、本稿では「高次表意への制約」という機能を持つ場合もあると考える点で異なる。

ノダが「高次表意の制約」に関与すると考えることによって、ノダ文が命令文として機能することも説明が可能である。ノダ文が命令や意志表明という機能を持つことについて、従来の研究では、提示された命題が「聞き手の取るべき行動を表していること」とその命題が「既定であること」から聞き手に命令や意志表明であることが理解されると考えている。例えば、田野村（1990:24）では「実現すべきことがらとしてすでに定まっているということであり、そこから意志の表明や命令といった意味合いが出てくるものと思われる」と述べている。しかし、そのような特徴は命令文として機能する非ノダ文にも命令文にも見られる特徴である。<sup>1214</sup>一方、ノダが「高次表意の制約」に関与すると考えればその違いを説明することが可能である。

(28) 黙っているんだ。

(29) (文句を言う相手に) 黙っている。

(28) (29) は共に「話し手は聞き手に対し『黙っていること』を望んでいる」という表意命題が復元されるという点において、聞き手にとって関連性を有する発話である。(28) と (29) との違いはノダの有無である。ノダは、聞き手にとって「既に最適な関連性を有する命題」である「聞き手は私に『黙っていること』を望んでいる」という表意命題が「最適な関連性」を有することを意図明示的に伝達していることになる。つまり関連性を念押ししていることになる。この「念押し」は聞き手に「状況との関連」をあらためて（または再度）認識させることとなる。

(30) P：話し手は「(私が) 黙っていること」が発話状況において、私にとって関連性があることを念押しして述べている。

C：私は人の話に余計な口を挟んでいる。

Q：話し手は私に「(私が) 黙っていること」の持つ関連性を確実に認識させ、そのことによって私を黙らせようとしている。

提示された命題が聞き手に何らかの行動を示すものである場合、この念押しは「聞き手が行動すること」の念押しと解釈され、その結果 (28) の発語内行為が「命令」と解釈されることになる。

いわゆる「命令」のノダ文は通常の命令文が発せられた後などに使用されることが多く「聞き手が話し手の要求をすでに承知している状況（田野村1990：

<sup>1214</sup> 尾上 (1979:23) では平叙文がなぜ命令文として理解されるかについて「何かを相手に求め得るような、あるいは求めざるを得ないようなあり方の言語場において、実現を求めその事態内容をただそのまま「そこにすわる」とことばにすると、聞き手の認識能力によって、それは聞き手自身に向けられた要求の内容、あるいは聞き手がそこで為すべき行為の指定内容となる」と述べている。

25)」で用いられやすいという指摘がある(尾上(1979)も参照)。また、野田(1997:101)はノダ文の後に命令形命令文が来にくいと述べている。

(31)??働くんだ、働け働け、永尾完治! (??は野田(1997)の判断)  
命令形命令文は話し手の聞き手に対する「行為遂行への期待」のみを聞き手に伝達する。一方、ノダ命令文は「命題と状況との関連性」つまり「なぜ、この状況において、そのように行動することが私に求められているのか」を聞き手に認識させる。命令形命令文が「行動させる命令」であるのに対し、ノダ命令文は「論理を言い含め、納得させる命令」である。この特徴を持つノダ命令文は、命令した行動が遂行されなかった状況での再命令に適していると言える。したがって、命令文の後に用いられやすく、逆に初発の命令文としては用いられにくいと説明することができる。

(32)(友人宅へ行く子供に母が)ちゃんとご挨拶するんですよ。

また、野田(1997:101)はノダ命令文が「子供などに対して一般常識を言い聞かせるような場合」にも多く使用されると述べている。それも関連性を認識させ「論理を言い含め、納得させる」という特徴が、直ちに行動することを求められてはいない状況での命令に適しているからであると説明できる。

ノダが行う「高次表意への制約」はあくまで「念押し」から想定されるものであって常に「命令」であるのではない。したがって、ある状況では命令であっても異なる状況では命令とは解釈されないということがありうる。

(33)(手で食べようとする子供に父親が)箸で食べるんだ。

(34)(写真を見せ、外国の食事作法を語っている)箸で食べるんだ。

このように考えることによって、ノダが多種多様な発語内行為を遂行している<sup>15</sup>という母語話者の直観がなぜ生じるかが説明できる。「念押し」という行為はいわば無色透明であり、どのような発語内行為を念押しするかによって表面に現れて認識される発語内行為が異なると考えられるからである。

以上の考察から、ノダは、既に「最適な関連性を有する命題」であることが明確であると思われる命題を更に「最適な関連性を有する命題」として意図明示的に提示することにより、聞き手に対して「念押し」という「高次表意への制約」を明示する手続き的意味を持つと考えられる。

Wilson & Sperber (1993) では「高次表意を制約」する言語形式が存在しうることが示されているものの、具体的にどのような形式が該当するかは述べられていない。本稿の解釈は、Wilson & Sperber (1993) における分類の妥当性を

<sup>15</sup> このことは内田(1998:249)でも触れられている。また、国広(1992:18-19)ではノダ文が「決心」「柔らかな断わり」「難詰」「助言」「命令」等の発語内行為を遂行している例が『ののだ』の具体的な意味変容」の例として挙げられている。



立証するものでもあると言える。

## 5. まとめ

具体的なノダの手続き的意味には大きく3種が存在すると考えられる。

### (35) ノダの手続き的意味

- ① ノダは、文脈効果そのもの（またはその一部）を提示することにより、聞き手が復元する「表意命題」を制約する。
- ② ノダは、関連づけの出発点となる命題を提示することにより、聞き手が導き出す「推意命題」を制約する。
- ③ ノダは、「既に最適な関連性を有する命題」をあらためて「関連性を有する命題」として提示することにより、関連性の存在を念押しし、聞き手が復元する「高次表意」を制約する。

本稿の考察によれば、これら3つの手続き的意味は「ある命題が『最適な関連性を有すること』を意図明示的に伝達する」という点で共通の特徴を持つ。しかしその一方、ノダは一形式で「表意」「推意」「高次表意」の異なる3つのレベルで機能することになる。ここにノダが様々な表面的用法を持つ理由の一つがあると考えられる。高次表意復元のプロセスについての更なる考察が今後の課題である。

## 参考文献

- 青木惣一 (1996) 『『確信度』を用いた『のか』の語用論的分析』『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』19 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター, pp. 1-27.
- 内田聖二 (1998) 『『(の)だ』—関連性理論からの視点—』小西友七先生傘寿記念論文集編集委員会編『小西友七先生傘寿記念論文集 現代英語の語法と文法』大修館書店, pp. 243-251.
- 尾上圭介 (1979) 「そこにすわる!」『言語』8-5 大修館書店, pp. 20-24.
- 武内道子 (1994) 「関連性に関する制約—『のだ』をめぐる—」『ふじみ』16 富士見・言語文化研究会, pp. 3-16.
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法Ⅰ』和泉書院.

- 野田春美 (1997) 『の (だ) の機能』 くろしお出版.
- 三尾砂 (1948) 「文の類型」『国語法文章論』三省堂 (服部四郎他編『日本の言語学 第3巻 文法 I』(1978) 大修館書店に再録, pp. 347-384).
- Blakemore, Diane (1987) *Semantics Constrain on Relevance*, Blackwell.
- Blakemore, Diane (1988) 'So' as a constraint on relevance, in Ruth M. Kempson (ed), *Mental representations: the interface between language and reality*, Cambridge University Press, pp.183-195.
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances an introduction to pragmatics*, Blackwell. (武内道子・山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房1994).
- Carston, Robyn (1988) Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics, in Ruth M. Kempson (ed), *Mental representations: the interface between language and reality*, Cambridge University Press, pp.155-181.
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson (1986/1995) *Relevance: communication and cognition*, Blackwell. (内田聖二他訳『関連性理論』第1 / 2版 研究社出版 1993 / 1999).
- Wilson, Deirdre & Dan Sperber (1993) Linguistic form and relevance, *Lingua* 90 (1 / 2), pp.1-25.